「コレ阿呆陀羅經やがナア。」
「なんでこないに火がつかんのやろ。」
「あんた、火口をつけたか。」
「そらまだや。」
「火口をつけんと火がつくかいナ。」
「あわてゝるのんや……ハークション……火が消た、ゆをんの煙が鼻へ這入つたんで惡々うえぐゝ、クツシヤミが出よる……行燈を此方へ持といで……ほんに冷う成つてる、水を持つて來い水を……ゴク〳〵〳〵……ウム是なら大丈夫や。」
「お前が飲でどうするねん。」
「あわてないナア。」
「お前があわてゝるのやが、早う水をかけたげなはれ。」
「よつしや呼んだげ、何や云ふ名前やつたナア。」
「ハイ、松本丹下で御座ります。」
「違ひない、たんきりさんえナーア、嬶お前も呼んだげ。」
「旅のお侍さんえナーア、これ娘さんあんたも呼んだげなはれ。」



「お父上様えノーヲ。」
「たんきりさんえナーア。」
「旅のお侍さんえナーア。」
「お父上様えノーウ。」
「おとゝ様えノーウ。」
「お前がお父様と云ふ事があるかいナア。」
呼べど叫べど最う此の世の人では御座りません、なんし田舍の事で直ぐにお醫者を迎へる事もならず致方が御座居ませぬので此の事をお庄家に話を仕ますと、常から正直な男で御座りますので、お庄家も、お前も惡氣で仕た事ぢやない、と内々で野邊の送りを致しまして、一方は濟みましたが後へ殘つた娘はん、あんたどうする、と尋ねますと根が利口な娘故、身寄の無い者故、宜敷御願申します、と云ふので夫れでは女房お累の妹で、藁の上から京都へ子に遣つてあつたのが歸つて來た事にして名をお玉と致しました。村へ屆けましたところがなんし堀越村の樣な草深い處へこんな綺麗な女が來たのでまるで塵芥場へ鶴が降りた樣な物、寄場へ若い者が集ると、お玉の噂で持きつて居ります。
「オイ、半鐘のチヤン吉、蛙ふんだか久太郎、池の端の龜公、こつきの源太、そんなら宗助、メて十助皆此處へお出で、どうや與次平處のお玉。」